

## 日本最初の磁器と李参平

有田焼は日本の焼きものの代表ですが、近年有田焼の初期の古伊万里染付が、愛陶家の間で高く評価され、現在も大変にもてはやされています。その庶民的で単純明快な染付文様に、日本人であれば郷愁を感じるような魅力があるせいかもしれません。

今から約350年程前の元和2年(1616)、朝鮮人陶工李参平は九州有田の山中の窯で宿願の白磁をついに焼きあげました。これが肥前有田磁器のはじまりであり、同時に日本磁器の創始でもあったとされています。

李参平は文禄慶長の役にさいし、朝鮮に出陣した佐賀藩の家老多久長門守に従って文禄3年(1594)に日本に渡来し、領主長門守の命で陶器製造にとりかかり、まず佐賀城外の唐人古場に開窯しましたが、数年後西多久の高麗谷に窯を移して唐津風の粗陶器の製造に励みました。領主は参平の業績を認め、妻を娶らせ、名を日本風に金ヶ江三兵衛と命名しました。三兵衛は高麗谷陶業経営のかたわら、磁器の焼造を目指し、藩内の山野をくまなく踏査して、良質の原料の探索に努めました。苦心の結果、ついに有田川の上流にあたる現在の有田町泉山に白磁鉢を発見しましたので、元和2年に領主の許しを得て、一族18人とともにこの地に移住し、泉山原料地にほど近い上白川天狗谷に窯を築きました。そしてこの年に三兵衛は白磁と染付の焼成に成功し、日本の陶磁史は新しい時代を迎えました。

これが日本の磁器創業のいきさつとして昔からよく知られていることですが、これまでは科学的な裏付けのない伝承に過ぎませんでした。ところが、昭和40年に天狗谷古窯跡で本格的な学術調査が行われました。本年6月5日付朝日新聞の「日本磁器創業のナゾー有

田・天狗谷古窯跡の発掘」によりますと、三上次男氏を中心とする調査団は昭和43年2月の第4次発掘までに、4基の窯跡を調査しました。いずれも李朝時代の朝鮮で盛んに使われた登り窯で、山腹の斜面に築かれ、窯内部の残留物はすべて形状文様とも李朝磁器風のもので、原料は泉山陶石でした。最も古い窯(A窯)の創設は1615年頃で、三兵衛の没年も過去帳から明暦元年(1655)と、問題点が次々と明らかにされました。この結果、「元和2年(1616)、朝鮮人陶工李参平が有田郷の泉山で陶石を発見し、上白川天狗谷で磁器を創製した」という伝承も一度は史実として実証されたかに見えました。ところがその後の調査でA窯の下からさらに別の窯跡(F窯)が発見され、事態は複雑になりました。F窯はA窯と同じ朝鮮式磁器窯ですが、A窯よりも明らかに古く、窯中の遺物も泉山陶土による磁器でした。その結果、A窯を元和2年に三兵衛が始めた窯とすると、F窯はそれより以前に別人が創業した日本最初の磁器窯とみなす事もでき、初めて磁器を焼いたのが、伝承の通り元和2年かどうか、三兵衛であったかいなかの2点が再び疑問視されることになりました。

この天狗谷窯のほか、百間窯、内田小峠窯など数多くの磁器創業期の窯が発見されておりますが、今後はこれらの周辺窯の組織的調査によって、日本磁器創業の事実が解明されるのではないかと期待されています。

初期伊万里はこれらの窯で江戸時代前期に盛んにつくられたのですが、その素朴な愛すべき染付磁器は今後も愛陶家、研究者、古美術商の間にいろいろと興味ある話題を提供してくれることでしょう。

季刊 美のたより No.21

昭和47年7月1日

発行 大和文華館